

# この子供たち

(5)

イーディス・ウォートン作  
松原至大訳

## 映画女優の訪問

マーティン・ボインは、ジュディスにテリーの家庭教師についての意見を求めるられて、あの青年を、どう思うかと聞かれた。これには困った。ボインは、自分でもどう考えているのか、わからなかつた。前日の、問題のオームロッド氏に会つたが、その時は、ボインの方が、氣おくれがしていた。オームロッド氏はいかにも大学生らしい。眉目秀麗のイギリス青年である。長く乱れた美しい髪、ものうげで皮肉な灰色の目、不平そうな口付きをしていた。だが教養があつたから、彼に教えを受ければ、テリーは、スコープについているよりは、得ることの多いのは、確實である。ボインが当惑したのは、自分は他人に教師を選んでやる柄ではないばかりか、子供の両親がいるのに、そんなことをするのは、ばかげたことだと思つたからであつた。けれどオームロッド氏は、迷惑そうでもなかつた。テリーを見て、よい子だといつたが、ただ一つの不満は、サラリーのことであつた。ボインが切り出したのは、世間並みよりもかわらず、オームロッド氏の考え方と隔りのあることが、すぐにわかつた。この青年は、トラデスチ公爵夫人がひどく值切つたこと、それはひどい行為であることを語つて、サラリーだけは、どうしても譲らなかつた。

ボインは、ホキータ夫人が別れぎわにいつたことを思い出して、緩和策としてバンのことを持ち出した。

「ボンデルモントという人の、小さな男の子がいるんです——まま子みたいなもので。これがナースの手におえま

せんでな。君がその子も、当分面倒を見て下されば——」

これで取引きは、オームロッド氏の有利なように解決した。そしてボインはホーカー夫妻に、長男のテリーは、その次日の日から勉強を始められると、報告することができた。

そこで話はもとへもどって、ボインは、ジュディスの問い合わせに答えなければならない。

「あの男は、うまく、ぼくを負かしましたよ。しかし、どれだけテリー君を勉強させますかね。」

「あら、テリーがあの方に、勉強するようになりますわ。母が寒氣で、なによりです。もしそうでなかつたら、父はサラリーのことで、はねつけてしまつたかもしれません。父は私たちに、寛大でないのではありません。世間の人たちが、なぜいりもしない學問をしたがるのか、それがわからないのです。なんの役に立つのかと申します。」「こういつて、ジュディスは額にしわをよせた。「私にはわかりませんの。あなたにはおわかりになりまして。でも、テリーが望むのなら、きっとよいことだと思います。あなたは、たくさん本をお読みになりましたでしょ。私は、これから先も、読書はできても思えません。読む時間など、少しもありませんもの。」

ボインは、今に時がくるであろうといつた。ちょうど今、両親が子供の教育に心を用い出したところであるから、テリー君におくれないためにも、この機会をつかんで、学校へあげてもらつてはといい添えた。それを聞いて、ジュディスは、悲しそうにほゝえんだ。

「まあ、私が、学校へ。いつのことなのでしょう。私には、いつだつて世話をしなければならない子供たちがおります。それにチップがテリーくらいの年になりますと、私は学校へ行くのには、年をとりすぎてしまいます。それよりも私は子供たちと離れようとしないで思ひません。私、ピスクラにいた時、みんなとお誓いをしました。私たちは、二度と離れ離れにならないようにしましようつて。チップまでが拳をあげて『誓います』って、いわされました。ですから、なにかむづかしいことが、またおこつた場合、私が学校に行って、そこにいませんでしたら、だれがその誓いどおりにしましょう。」

「でも、今はみんな御両親といつしょに、なられるのですから、誓いは誓いとして、少しは自分のことも考えてみませんか。」

ジュディスは、少し赤くなつた。

「私も。でも、私はまた二週間ほど、みんなを連れて、スイスへ行かなければなりません。これはテリーにまかせておけません。それに、オームロッドさんは、私たちといつしょには、おいでになりますまい。」

「いつしょに行かない。そのために、頼んだのじやありませんか。」

ジュディスは、母親と同じよう肩をすくめて、ふしぎそくな、鋭い小さい顔を、ボインの方へむけた。

「あら、そんなら申しますけど、母があの方をおやりにならなければ。」

「おかあさんが、なにをいつているのですよ。あの青年を見つけたのは、おかあさんですよ。おかあさんは、人のことは、よく御存じですよ。おかあさんは——」と、ボインがいいかけると、

「母は、あの方といつしょに、ヴェニスにいたいのです。」と、ジュディスは恐しいほどの早さで、ボインの言葉をつぎだした。今度は、ボインが赤くなる番であつた。スコープが突然する癖の一つと同じように、ボインは目をそらして立ち上りながら、自分の椅子を押した。ジュディスはテーブル越しに、おづおづとボインの服の袖にさわった。

「お気にさわるようなことを申しましたの。」

「あなたは、ずいぶん、ばかりたことをいいましたね。あなたが大人だったら、聞いておられませんよ。」

ジュディスは赤くなつて、立ちあがつた。怒りでふるえながら。

「あなたに、私の年がおわかりになるのですか。私は、あなたのおばあさまと同じくらいです。あの丘おかと同じに年をとっています。あなたは、私が母のことを、ああいつてはならないと思うていらっしゃるのです。でも、ほんとうのことを、私、あなたのほかにお話する人がない時は、どうしたらよいのでしょうか。」

ボインは、ジュディスがこうした調子で話した時、自分が感動されているのか、それとも怒られているのか、

少しもわからなかつた。こうじう時は、いつもローズ・セラーズの幻影が、彼を捕えた。そしてこのふしきな子供のことを、息をもつかずに、ローズに説明している自分の姿を浮べるのであつた。

「学校へ行かないなんて、あなたは大ばかですよ。」

ジュディスは、それに答えもせず、悲しそうに見かえして、こういつただけであつた。

「もつとこゝにいらしゃるのでしたら、私に御本を貸して下さいますわね。」

「いや、もうこゝにはいませんよ。明朝出発します。」

ボインは、怒つたよう答えた。ジュディスの目を見れば、涙を見るであらうと思つたので、ほかの方を見ながら。ジュディスの怒りは、もう静まつてゐた。ボインは、見なくともわかつてゐた。そばに小さくなつて、立つてゐるのだと感じた。

「マーティンさん、もうといて下さいませんか。まだいろいろなことが残つています。父と母とは、これから先きどいえ行くのかきまりていません。することができないと、きまりて争ひをいたします。だれもじょしょに、ヨットにのせて行く人もないのです。この巡航が終りますと、父はパリへ行きたいと申しますし、母は自動車で、イタリアの丘のある町へ行くと申しています。それではまたふたりが、けんかを始めることになりますと、私たち子供は、どうなりましよう。」

ボインは後をむいて、ジュディスの腕をとつた。かたわらのがたがたした古いベンチに、

「さあ、おかげなさう。」と、自分で、自分もそばに腰をおろした。

「あなたは、あまり物いとぎ、かた苦しく、考えすぎる。あなたには、荷が勝ちすぎる。それで疲れきつてゐる。それだけのことですよ。ぼくはこの二日間、あなたの御両親といふことにいましたが、別に気まづいこともあります。ただ一つ困つたことは、おふたりとも金がありすぎる。それが、おふたりをいらいらさせるのですよ。ちょうど歯が生える時のようなものです。歯もあまり生えすぎると、かみにくくなりますよ。でも、おとうさんは、じきにみ

んなといつしょに、巡航にでかけますよ。そしてあなたの方の夏の計画を立てて下さるでしょう。おとやさんは、この土地がテリー君のために、あまりよくなないことを見つけていた。どこか山に落ちついて、早く勉強のできるようにして下さるでしょう。』

その時、ボインは砂利の上を歩く音を聞いて、ふりかえた。女中が、名刺を持ってきたのである。女中は、名刺をボインに渡した。それは大きなかたい原紙の一片で、「レンチ侯爵夫人」と記してある。そしてその下には、無教育者らしい下品な字で、「私の娘ジニー・ホイータに会いにきました」と書いて、「私の」を消して「かの女の」となおしてあった。ボインははそれを見てから、ジュディスにわたした。ジュディスは驚いて、とびあがった。

「あら。ジニア・ラクロスにもがいありません。まあ、また結婚したのよ。では、ほんとうですわ、ブランカが新聞で見たといひたのは。」

入口のところから、はなやかな、かん高い声がした。そして小さな木の茂みの間を通って、けばけばしさと宝石とを輝かしながら、香水の波につて、おばけのような婦人が、ふたりの方へ近づいてきた。

「まあ、ジュディスさん——あんたなの。」

こうはいつたが、このお客は、ジュディスを見ているのではなかった。じつと立ちどまって、エナメルを塗ったようなまつ毛の放射線の中に、宝石のようにはまつた大きな目で、ボインを見ていた。その女は、完全な卵形の顔と小さくて兎事に曲った口をしていた。それがジュディスの方を向いて、身体を抱いた時は、ボインは吐き気を感じた。

「ねえ、ジュディスさん、またお目にかかるねえ。このお友だち、どなた。」

「ボインさんとおしゃって。おとうさんのお友だち。こちらは、ジニア・ラクロスさん。」

「そらじやないのよ。レンチ侯爵夫人ですよ。初めまして、ボインさん。映画スターは、こういいながら、とりすまして手をさし出した。けれど、すでにボインを検査しつくしていく、ボインに話しかけた時は、肩越しにほかを見ていた。

「私、ジニーに会いたいのよ。レニーが、ゴンドラで待っているのよ。レニーツて、私の主人よ。私、ジニーをあの人にはわせる約束をしたのよ。」

とり入るようなまなざしで、ジュディスを見た。けれど静かに向い合ったジュディスは、急に背が高くなつて、威厳が出たように、ボインには思えた。弟たちのむづかるのをしからなければならない時に、いつもかの女がするものと同じように。

「ところど、ジニアさん、あなたは、よく御承知ですわね。」と、ジュディスがいった。いつもボインに不安を抱せる、あのかんの高い声で。

「なんなの。」

「どういうお約束であったか、御承知でしたわね。スコープと私は、どんなことも聞き入れないというお約束。」

「つまらないことをいうのね、この子は。あんた、私があの約束を破るとでも思つて。といつて、私、クリフさんとの昔の手切金が、充分だとも思つてやしませんよ。あれくらいじや、絹のストッキングだつて、なかなかはけやしない。私がジニーを連れてでも行こうとうとしたら、半秒だって、私、ここにいやしませんよ。でもね、私は、私だって産もうと思えば、子供が産めるということを、レニーに見せてやりたいだけのよ。男ってそりやおかしなもの。私に子供があったとは、とてもあの人、信じないのよ。それにもちろん私は、あの人にはあと継ぎがなければ、困るということは察してますわ。ねえ、ジュディスさん、私、いつもあんたとは正直におつき合いしてましたわね。あの子に会わせて下さいな。あの子に、いいおみやげを持ってきたのよ。それから、あんたにも、とてもきれいなものあんたに母親の気持ち、わかるかしら。」

ジュディスは、まだこの上なしに、固い直立の姿をしていた。冷やかに結ばれたそのくちびるが、この映画女優のためにほんの少しばかり動いた。女優がいつた最後の言葉などは、聞いてもいないようであった。

「お会いさせますわ。そんなに興奮なさらなくてもよござります。ただここで、私とボインさんのいらしゃると

ころで、お会いさせます。あなたの御主人が、ゴンドラからおりて、ここへいらっしゃればいいのです。」

「ジュディスさん、あんたがレディーとして育てられているんだつたら、あの人にロード・レンチといわなくちや。」

ジュディスは笑い出した。

「あら、それならば、あなたは私のことを、ミス・ホイータとおっしゃらなければ、でもジニーにお会いしたいのなら、ぐすぐすしてはおられませんよ。もうじき父がむかえをよこして、子供たちをヨットに乗せて、連れてつてしまりますから。」

「あら、ジュディスさん、あの人、私がジニーに会う邪魔はできなくてよ。」

「だれも邪魔はしません。私のいうとおりになされば。」

レンチ侯爵夫人は、少しの間、みがき上げた卵形のつめを見ながら、この最後の言葉の意味を考えていた。やがてふきげんそうにいった。

「そうするわ。でも、あの人、ゴンドラから出でくるとは思えやしない。とても物ぐさだから、折角ジニーを母遊びに、連れて行こうと思つたのに。」

「私、ジニーを呼んできます。」

ジュディスはボインにこういつて、家の方へ歩いて行つた。だが、その時、ガラスの玉で飾つた小さな女の子が、庭をくろげるよう走つてきて、ジュディスの腕の中にとびこんだ。

「あの人、ジニアさんでしよう。私懶から見てたのよ。ナニーはちがうといつたけれど、私、知つてゐるわ。あの人自分ののかわいいジニーに、会わずに帰りやしないわね。もしかそつだつたら、私、きかないから。私にはおみやげ持つてきたかしら。あの人、いつもそつよ。ブランカは、あの人のお着物を見たがつて、大騒ぎなんだが、スコープが許さないのよ。ドアにかぎをかけちゃつたの。」

ジュディスは、肩をすくめた。

「まあ、そんなにしなくとも、いいのに。ブランカが、あなたのおかあさんに会いたがって、いけないことないわ。まあ、私をつねること、やめてちょうだい、ジニーちゃん。そんなに心配しなくとも、よくってよ。あなたのおかさんは、もどりますよ。新しいだんなさまを呼びに行つたのよ。あなたに紹介するために。」

「新しいだんなさまって、なんていう人。おかあさんが、新しいだんなさまを持つたなんて、だれも教えてくれなかつた。いつもみんなはいつてるのよ。『あんたは、まだ小さくて、わからない』って、だつて、私、ジニーの娘じやないの。おねえちゃん、おかあさん。おみやげ持つてきた。もしかチヨコレートばかりだつたら、みんなにわけて上げるけど宝石だつたら、私、あげない。」

ジニーの赤い髪は、もじやもじやと巻かれて、顔はものほしさと、待ち遠しさとで懐えていた。くぼみのついたごぶしを、ちらりとさせて、新しいマーセリアのビーズを、首からはずすと、上着のポケットに入れた。

「あかあさんにお金にするのに、よそでもらつたものを、つけとくことないわね。かまわないかしら、マーティンさん。」

ジニーは、その日の朝、その首かざりをやつたボインに、こう呼びかけた。ボインは、思わず吹き出した。ジュディスは、ボインがとめるのにも聞かずに、

「まあ、礼儀知らず。」といつて、ジニーをはげしくゆすぶつた。ジニーは泣き出した。

「そしたら、レニー、ご覧の通りよ。私、弁護士を連れてくればよかつた。ホキータ家の人たちば、私の子にいつもああよ。」

レンチ夫人が庭に立つて、泣いている自分の子を指さしながら、訴えていた。

「ああ、かわいそうに。」

夫人の肩の上には、病身らしい顔をして、大きな口と、ぬけ上つた額とをもつた背の高い若い男のおどおどした目があらわれた。(つづく)